

健康データ活用法は

弘大COI特別講演会

筑波大の事例紹介

弘前大学と県、民間企業が連携して認知症や生活習慣病の早期予兆発見、予防法開発に取り組みプロジェクトの研究拠点「COI研究推進機構」事業の一

環で、弘大は7日、同大大学院医学研究科で特別講演会を開いた。筑波大学医学医療系の我妻ゆき子教授が講師を務め「食、運動、健康、医療をつなぐ、

代健康生活の創造」と題して講演した。我妻教授は、筑波大と茨城県厚生連が2015年から共同で取り組んでいる健康推進事業について、定住人口の約7割を占める水戸地域で、食と運動、健康を統合したデータベースを構築し、デー

に基づき健康づくりや健康情報サービスにつながることを目標だと説明。健康診断を行った病院がそれぞれ異なるデータ管理システムを利⤵用しているも、標準化したデータを抽出できるプラットフォームを構築したことを取り上げ「将来的には海外との健康データと共同解析や予後解析が可能だ」とした。



健康医療データの共有化や活用への取り組みについて講演する我妻教授

健康データの利用に關しては、病院のリハビリテーションセンターやデイケアセンターが営む健康志向のカフェのような、栄養士や薬剤師が相談に応じられる場所を例示。利用者に健診結果を参考にした健康上のリスクを伝えたり、健康づくりに向けた動機付けにも利用できると説明した。（田中康貴）